

最近の新聞世論調査、投書欄などから

「地域の繋がり」・「あいさつ」・「子どもの見守り」

6 / 12: 世論調査 “人間関係の希薄さ”

「社会の人付き合いや人間関係が希薄になっている」80%で、2000年調査対比7%増。特に20代で14%増。

その理由は「人との接触を煩わしいと思う人が増えた」49%、「人の立場を理解できない人が増えた」48%、「テレビゲーム・パソコンなどで一人の時間を過ごす人が増えた」45%など。

家族以外で大事にしたい付き合いは、「隣近所」が70%でトップ、「親戚」55%、学校時代の友人46%、「職場関係」42%

「日頃人と接していて気になること」は、「あいさつの出来ない人が増えている」53%、「目上の人などへ丁寧な言葉遣いが出来ない」48%。一方、友人・知人とのコミュニケーションで携帯メールを使う人は46%。20歳代93%、30歳代81%に達した。

携帯メールの人間関係に及ぼす影響では、「誤解が多くなる」34%、「人間関係が表面的になる」29%「感情や思いを面と向かって伝えられなくなる」25%などマイナス面が上位。

4 / 5: 世論調査 “子どもの安全「地域力」で”

7割近くの人が地域の子どもの犯罪の危険に遭う不安を感じていて、その対策が不十分と感じている人は57%

パトロールなどに協力したい人は小学生の親で93%、全体でも82%。但し実際に参加して居るのは21%に止まり意識と行動に大きなギャップがある。「地域の連携を深めていくことが、犯罪の起こりにくいまちづくりに繋がる」と考える人は全体の90%を占めた。前警察庁長官佐藤氏によれば、「かつての濃密な人間関係の再生が望まれているわけではないが、例えば近隣の人と挨拶を交わすだけで犯罪者が入りにくい街になることに人々は気づき始めている。」

7 / 11: “子育てで気付く地域のつながり” 子どもが居なかったら「隣は何をする人ぞ」でこの街への愛着は芽生えなかった。子育てに詰まったときも近所との付き合いで気分が変えられる。近所の人も小さいときから知っているから注意も出来る。

6 / 12: “家族の心が通う挨拶を”

家族間で「おはよう」、「おやすみなさい」、「いってらっしゃい」、「ただいま」

7 / 15: “家庭や地域でも自然とあいさつ”

こどもは気恥ずかしさであいさつの言葉が出ない 家庭でも地域でも大人が率先して「おはよう」、「こんにちは」、「ありがとう」

8 / 11: 「おやじの会」は先生の手に残る活動を引き受けることで学校を応援していく。PTAとは違い元保護者や地域の人が参加して学校と地域を繋ぐ存在意義がある。但し新規会員が増えずメンバーが固定化している悩み。多様な関心・得意分野を持つ父親が参加できる工夫が必要。国際調査によると、日本の父親が平日子どもと過ごす時間は平均3時間で最短、タイの半分。

03 / 6 / 23: “「お上」頼みの風潮”

松戸市・世田谷区の「すぐやる課」では、地域社会で解決できる問題が、役所に持ち込まれていると言う。「隣家の庭木がはみ出している」と言って来る住民に「お隣同士で話し合ってみては」と助言すると、「普段挨拶さえしていないのに」と当惑されるケースも。身近な問題を何でも「お上」に委ねようとする風潮は心配だ。

8 / 20: “納涼祭通じ交流”

団地では毎年夏休みに「バーベキュー」納涼祭がある。日頃顔を合わせない人たちと準備から調理まで力を併せ一つのことをやり遂げ、程よい人間関係が産まれる。

8 / 25: “地域の安全力アップ、あいさつ運動で子どもを守れ”

別紙コピー参照

7 / 19: “あいさつが示す仕事への積極性”

あいさつができないと職場でも意思疎通が出来ず仕事は出来ない。

あいさつは自分から声を掛ける

8 / 22: “助け合うコンクリート長屋(マンション快適ライフ)”

コミュニティづくりには日頃の交流の積み重ねが重要。付き合いがあれば問題が起きても良い解決法が生まれやすい。そのためのポイントは、・あいさつを心掛ける・草取りや掃除などを協力し合う・こまめな懇親会やお喋りの場を持つ、など。

8 / 29: “子育て支援、防災、防犯・・・ 欠かせない「地域の輪」

浦安市マンションの「子育てサロン」事例、幕張ベイタウン17マンション住民が有志の「シニア倶楽部」や自治会などで連合会を作りマンションの枠を超えて防災、防犯などに活動中。

学

教育現場や地域で「あいさつ」の力が見直されている。これまでは生活指導の視点から学校単位で導入されることが多かった「あいさつ」運動。自治体が旗振り役となり地域ぐるみで取り組む例が目立つ。子どもが巻き込まれる犯罪が増えるなか、地域の「安全力」を高める狙いもある。

学校で旗リレー

この旗は、同県が今年度から始めた「神奈川あいさつ一新運動」の一環として導入。四十六本を県内の小中学校、高校などでリレーする。旗が回ってきた学校はあいさつに関する独自の活動をして、次の学校に回す仕組みだ。

鶴見総合高校三年の安積久美子さん(17)は「あいさつを交わすようになり、しないことが気持ち悪いくらい」。あいさつを促すチラシを学校説明会で計三千枚配布して、中学生や保護者にアピールした。

旗を受け取った神奈川工業では野球部員が校外でのランニング時にあいさつを励行。木村博文教頭は「盛り場も近いので、防犯に役立つと近隣の小学校から感謝された」と満足げた。駅頭で旗を掲げてあいさつしたり、学校周辺を清掃しながらあいさつを呼び掛けた

東京都。都内の学校に通う児童・生徒やPTA関係者ら約六千人が参加し、「あいさつは魔法の力」とのテーマ曲も発表した。先行例の一つとして紹介されたのは、世田谷区立京西小と川崎商店街の活動。三年前に同小が「挨拶と笑顔が自慢の京西小」との標語を作った運動を始めた。とに商店街も商調、標語の「京西小」部分を「商店街」

東京都。都内の学校に通う児童・生徒やPTA関係者ら約六千人が参加し、「あいさつは魔法の力」とのテーマ曲も発表した。先行例の一つとして紹介されたのは、世田谷区立京西小と川崎商店街の活動。三年前に同小が「挨拶と笑顔が自慢の京西小」との標語を作った運動を始めた。とに商店街も商調、標語の「京西小」部分を「商店街」

地域の安全力アップ

あいさつ運動で子どもを守れ



鶴見総合高校から「あいさつ一新運動」の旗を引き継ぐ神奈川工業高校(9日、横浜市神奈川区)

自治体が旗振り役

子どもの遊具・施設にヒヤリ

埼玉県ふじみ野市の市営プールで起きた桶まじり事故。身近な遊具や施設での「ヒヤリ体験」や管理者の対応について意見を募集します。二百四千字程度。電話番号を明記し、〒100-8806日本経済新聞社社会部「育ち・学ぶ」係(FAX03-3279-5970、電子メールshiba.kai@kyo.nikkei.co.jp)まで。8月15日必着。掲載分には謝礼を差します。

顔見知りが大切
ある時、目黒さんの店に「お母さんに電話をして」と顔見知りの子どもが飛び込んできた。避けて逃げがしたのだが、目黒さんが車で送り届けて事なきを得た。「こちらの顔を知らなければ助けを求めなかったはず」と目黒さんは振り返る。

都は十一月までにあいさつ運動のモデル地区を十カ所選定し、事例集を作ってノウハウを共有する計画を進めている。

あいさつ運動に乗り出した自治体としては、県単位では豊島、山梨、島根など大分などがある。都は「以前はしつけの観点からあいさつ勸行が叫ばれたが、防犯や地域の活性化に役立つと気付く自治体が増えたのでは」「(青少年・治安対策本部)としてこめ。

あいさつには防犯上の効果がある。財団法人「都市防犯研究センター」(東京・新宿)が一九九六年、空き巣狙いの容疑者に関する調査したところ、犯行をあきらめた理由として「声掛けられた」との回答が六三%と最も多かった。

このデータが同時に示すのは、街頭のあいさつには予期せぬ人と接触危険身を守る注意も必要に

顔を知らんでいること。子どもたちは「あいさつを返さないと知らない人にあいさつをする」となると「と諭される一方、身を守るために「知らないと身を守るために」とも教えられる。防犯活動を各地で推進している特定非営利活動法人(NPO法人)「日本ガーディアン・エンジェルズ」(東京・中央)の小田啓二理事長は「安全なあいさつ」をできる助言している。